

## 髄液スキャッタグラムの特徴が診断の一助となった4症例

◎関 悠里<sup>1)</sup>、長嶋 和子<sup>1)</sup>、佐藤 聖子<sup>1)</sup>、大澤 道子<sup>1)</sup>、星 雅人<sup>2)</sup>  
藤田医科大学病院<sup>1)</sup>、藤田医科大学<sup>2)</sup>

## 【はじめに】

当院では、XN-3000 (Sysmex) に搭載された体液モードを使用し、髄液の細胞数算定と細胞種別を報告している。報告の際、目視再検の基準はスキャッタグラムと HF-BF 領域 5/ $\mu$ L 以上で判断している。今回、体液モードで特徴的なスキャッタグラムを示す4症例を経験したので報告する。

- 【症例】①60 歳代 男性 クリプトコッカス性髄膜炎  
②70 歳代 女性 肺腺癌の脳転移  
③70 歳代 男性 汎発性帯状疱疹/髄膜炎疑い  
④50 歳代 女性 バーキットリンパ腫の髄膜浸潤

## 【結果】

①では SFL 低輝度領域にデブリスが出現していた。計算盤にて円形で辺縁が厚く、内部が明るく抜けた二重のリング様の成分が観察された。FilmArray 髄膜炎パネル検査から *C. neoformans/gattii* が検出された。②から④では HF-BF 領域 5/ $\mu$ L 以上であったため、それぞれ計算盤とギムザ染色での目視を行った。②ではスキャッタグラムの HF-BF 領域の高い位置にプロットが確認された。計算盤では円形で

大型、核小体を有する濃染した細胞が散見され、ギムザ染色では核小体明瞭、粘液様の空胞を有する細胞が観察された。③のスキャッタグラムは単核球領域から HF-BF 領域まで直線状に波形が伸びていた。計算盤では円形で大型、ときに核小体を有する濃染した細胞を認めた。ギムザ染色では好塩基性、核偏在、核周明庭の特徴をもつ細胞を認めた。追加で FCM を実施したところ、T 細胞優位であり反応性リンパ球の存在が考えられた。④のスキャッタグラムは③同様に単核球から HF-BF 領域まで直線状に波形が伸びていた。計算盤では大型で N/C 比が高く、核小体明瞭、核形不整な細胞が散見され、ギムザ染色では N/C 比が高く、核形不整、好塩基性の細胞を認めた。

## 【まとめ】

4 症例を経験し、自動分析装置の体液モードのスキャッタグラムの特徴から追加で計算盤やギムザ染色を行ったことで臨床へのアドバイス報告に繋がった。

連絡先：0562-93-2307